（様式3）

令和7年度　重点1

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	1	〇資質能力の育成
目標（評価規準）		「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を図り、確かな学力の向上につなげる。
重点に係る現状 設定理由		〇小規模校化が進み、多様な考えを出し合い新たな解を作る場面を意図的、計画的に設定する必要がある。全教職員が一人ひとりの児童の学習状況を多面的、多角的に把握しながら学力の三要素の定着、伸長を図る。 〇朝学習や放課後学習、家庭学習などを通して、基礎的な学力の向上に努めてきた。今年度はさらに、読解力をベースとした応用力の向上をめざし取り組みを強化していく。 〇グローバル表現科の推進を図り、郷土三崎を愛し多様な文化を大切にする国際感覚を身につける。 〇地域素材を教材化した問題解決的な学習を通して、思考力・判断力・表現力を高める。 〇指導と評価の一体化を意識することで、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図る。

評価資料	評　価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	・創造的な教育活動に関する設問（グローバル表現科・ICT教育） 全教職員が、前向きにとらえている。成果が着実に積み重なっている実感があると思われる。 ・基礎学力の定着に関する設問 ほぼ全員が「あてはまる」と回答しているが、A評価は半数に満たなかった。各教員がそれぞれ工夫した取組を実践しているが、手ごたえを感じるまでに至っていない。 ・認め合い高め合い（協働的な学び）に関する設問 A評価とB評価が、半数ずつ。教職員が意識して取り組んでいる様子がうかがえる。 ・家庭学習の充実に関する設問 A評価が33%、B評価が56%、C評価が11%という結果だった。昨年よりも数値が高まっているが、まだ低水準である。各自工夫して取り組んでいるが、さらに改善していく必要がある。
各アンケート等の結果	・「学校は、漢字や計算など基礎学力の定着に努めている」の設問には、82% の保護者が「あてはまる」と回答している。「よくあてはまる（34%）」「ややあてはまる（48%）」 ・「学校は、タブレットを活用するなどICT教育に積極的に取り組んでいる」の設問に、87% の保護者が「あてはまる」と回答している。「よくあてはまる（40%）」「ややあてはまる（47%）」 ・「学校は、量や内容など適切な家庭学習を実施している」の設問に、およそ76%の保護者が「あてはまる」と回答している。「よくあてはまる（30%）」「ややあてはまる（46%）」
自己評価結果 （見解と改善方策）	・ICT教育に積極的に取り組むことで、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に努めた。特に、AIドリルに関しては、各学年で工夫して取り組ませることで一人ひとりのニーズに応じた学びを展開することができた。教職員は手ごたえを感じている。ただ、保護者のアンケート結果はそれほど高くはない。情報発信に努め、保護者にも成果を具体的に伝えていく必要がある。 ・家庭学習の習慣化をめざし、宿題の量や質を工夫し継続して取り組めるように配慮した。また、高学年においては、必要に応じてタブレットを家庭に持ち帰り、家庭学習の一助とした。ただ、アンケート結果によると保護者のニーズにはまだ応えきれていない。より良い家庭学習のあり方について、さらに研究を深めていく必要がある。 ・基礎学力を向上させるために、ドリルワークを中心に意図的、計画的に取り組ませた。朝学習では基礎的な学習に加え読解力プリントに取り組ませるなど工夫した取り組みを実践した。ただし、まだまだ成果につながっていないので、継続指導が必要である。
学校関係者評価結果	・児童数が多かった時代は切磋琢磨し、競い合って学力を高めている雰囲気があった。現在は少人数だが、その分きめ細かく見ていただけている。引き続き少人数の良さを生かし、学力向上へつなげていってほしい。・現在の学力を数値だけで見るのではなく、プロセスを大切にして欲しい。三崎小は、学力の土台を作ってくれていると思う。
最終改善方策	・基礎学力の向上を基盤に、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を図る。 ・グローバル表現科のさらなる質的向上をめざし、より一層研究を推進する。 ・ICT教育を深化させ、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させていく。 ・家庭学習の充実に向け、教職員で合意形成を図り具体的な方策を探っていく。

（様式3）

令和7年度　重点2

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	2	〇良好な人間関係の構築
目標（評価規準）		よりよい人間関係を築きながら、すべての児童が自分らしく、生き生きと活動している。
重点に係る現状 設定理由		〇基本的に相手を思いやれる優しい児童が多いが、コミュニケーション能力が未熟なため、すぐに怒鳴ってしまったり暴言を吐いてしまったりしてしまう児童もみられる。人とのかかわりの中で「自分の大切さとともに、相手の大切さを認められる」人権感覚を養うことにより、さらに思いやりをもって他者と接することができる豊かな心の育成を図る。

評価資料	評　価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	・あいさつなど基本的な生活習慣の維持、規範意識の高揚に関する設問 A評価、39%、B評価、44%という結果だった。教職員が全員意識して取り組んでいるが,一部規範意識に欠ける児童が見られる。課題意識を共有していく。 ・いじめ根絶に関する設問 A評価、56%、B評価、39%という結果だった。学校全体が同じ方向を向いて、よく努力している。さらに、継続的な取り組みが求められる。
各アンケート等の結果	・「学校は、子どもたちに寄り添いながら、深い信頼関係を構築するよう努めている」の設問には、91% の保護者が「あてはまる」と回答している。「よくあてはまる（52%）」「ややあてはまる（39%）」 ・「学校は、よりよい人間関係の構築やいじめの根絶のために授業や行事を工夫している」の設問に、87% の保護者が「あてはまる」と回答している。「よくあてはまる（40%）」「ややあてはまる（47%）」
自己評価結果 （見解と改善方策）	・毎週、子どもたちに「生活アンケート」を実施し、いじめに関する事などいつでも相談できる環境を整えている。また、スクリーニングシートなどを活用し、潜在的に困難を抱える子どもたちを把握するように努めた。 ・児童間のトラブル等については個人で対応せず、管理職を含めた児童指導委員会で対応するようにした。細かい点も含めて、当該児童や関係児童に十分に話を聞き、保護者と共通理解を図りながら人間関係の構築に努めていく。 ・保護者との情報交換、共通理解を図り児童の道徳性の高揚を図っていく。 ・人権講演会、ピンクシャツデー、人権コーナーの開設、土曜参観で全学級人権教育（道徳）の授業を公開するなど、年間を通して人権教育を推進することができた。今後も、思いやりの心を育みつつ、小規模校の良さを強みとして、認め合い高め合いにつながる教育活動の推進を目指していく。
学校関係者評価結果	・不登校の児童がいないのは素晴らしい。行き渋りのある児童については、さらに丁寧に支援していただきたい。保護者の児童へのかかわり方が、過保護か放任か二極化しているように感じている。個々に応じた対応が必要で、大変だと思うが引き続きのサポートをお願いしたい。
最終改善方策	・教育活動全体を通して人権教育を推進し、人権感覚豊かな子どもたちを育む。また、コミュニケーション能力を発揮し仲間と協働して課題解決するなど、自己肯定感を高める活動を継続して推進する。 ・小規模校ならではの強みを生かし、全教職員で全校一人ひとりを育てるという意識を大切にし、組織的な児童指導を行う。 ・SCやSSWと連携し必要に応じて医療や福祉、警察といった外部機関とも連携する。

（様式3）

令和7年度　重点3

本年度の重点に対する評価

本年度の重点	3	○地域とともにある学校づくりの推進
目標（評価規準）		「地域教育力」の活用を図り、豊かな教育活動を推進する。
重点に係る現状 設定理由		○グローバル表現科の目標にもある「郷土三崎を愛し」を中心に据えながら児童が主体的・探究的・協働的に課題解決に取り組める教育活動を推進していく。歴史と伝統のある三崎小学校、地域に愛されている三崎小学校であることを常に意識し、その期待に応えられるよう「三崎らしさ」を大切にしつつ、家庭・地域と協働した学校づくりを進める。また、学校の状況や本校の教育活動のねらいを積極的に情報提供し、家庭・地域・学校がともに連携して子どもたちを育む風土を醸成していく。

評価資料	評　価
教職員アンケート結果 （具体的方策ごと）	・通信等で保護者に学級の様子を詳しく知らせているに関する設問 7割を超える教職員が、A評価。保護者のニーズによく応えていた。 ・授業参観等で家庭との情報共有、共通理解に努めているに関する設問 A評価が、8割。B評価が2割。学びの成果や課題について丁寧に情報提供していた。 ・地域の人材、素材の教材化に関する設問 ９割の教職員が、あてはまると回答している。グローバル表現科の学習において地域を教材化したことがあげられる。
各アンケート等の結果	・「学校は、グローバル表現科を中心に創造的な教育活動を行っている」の設問に対して、7割近くの保護者が「よくあてはまる」と回答しており、「ややあてはまる」と合わせると、９２%に達している。 ・「学校は、三小だよりなどで学校の様子を伝えるよう努めている」の設問には、９０%以上 の保護者が「あてはまる」と回答している。「よく（52%）」「ややあてはまる（41%）」 ・「学校は、地域の人材や教育資源を積極的に教育活動に生かそうとしている」の設問には、９３% の保護者が「あてはまる」と回答している。「よくあてはまる（55%）」「ややあてはまる（38%）」
自己評価結果 （見解と改善方策）	・グローバル表現科を本校教育活動の柱とし、「郷土三崎を愛し、多種多様な文化や考えを尊重する国際感覚豊かな児童の育成」というねらいを達成するため、教育実践を積み上げてきた。各学年が児童の実態に応じて創意工夫し、様々な実践に取り組む中で、地域の人材や教育資源を最大限に活用していく事ができた。ALTの母国であるオーストラリアの言語、文化交流だけでなく、年間を通して香港及び台湾の小学校とオンライン交流できたことは、異文化理解を深めることにつながった。さらに、テキサス大学の学生や中国の小学生が来校し文化交流を深めたり、一週間にわたり12名の台湾児童が本校で留学体験したりしたことは、直接触れ合って信頼関係を築いていくことの価値を再認識することにつながった。 ・PTA運営委員を中心とした保護者、地域の協力を教育活動に生かせた。今後も継続して教育活動に関わる学校の考え方、教育活動の様子を発信し、地域に信頼される学校、地域に根差した学校づくりを目指していく。
学校関係者評価結果	・特色ある教育活動が継続出来ていて素晴らしい。・日頃子どもたちと接していると、自分の言いたいことをしっかりと言える子が増えてきていると感じる。地域とともに今後もコミュニケーション能力向上に向けて頑張ってほしい。・近隣の小学校と合同で教育活動をするのも良いと思う。機会があればチャレンジして欲しい。
最終改善方策	・地域の教育資源を生かした教育活動を継続して推進していく。直接地域の人々と触れ合うことで、「郷土三崎を愛する気持ち」を実感を伴って育んでいく。 ・グローバル表現科や総合的な学習の時間等の学習成果を発表する学習発表会を年間計画に位置付け、見通しをもって取組を推進していく。学校行事などを公開し、地域・保護者へ学校の取組を積極的に発信する。地域に開かれた学校、地域に根差した学校づくりを継続して進めていく。